

遠藤氏 土産物の需要が低下すると、小豆の在庫がかなり増える。ポテトサラダの加工用ジャガイモの話もあったが、枝豆も食肉も基本的には業務用需要が低下した。また外国人技能実習生の往来も難しくなり、その影響も出ていた。そうした状況を本省に逐次伝えていた。

(高収益作物の)次期作支援交付金は途中で運用が見直され、支局にもいろいろな意見が来た。追加措置がつき年度中に交付ができる見通しになったが、作業が増えたことに申し訳なく思う。

—今季の営農への抱負や展望は。

村田氏 今年は根雪になるのが遅かった。皆、秋まき小麦を心配している。雪が溶けた後、どのように畑から顔を出してくるかが気がかりなところ。小麦は土壤凍結が入ると根が切れてしまい、枯れてしまうので心配だ。

土壤凍結は深く入っていて、1月で40~50cmくらいの計測が出ていた。春堀りナガイモを心配する声もある。近年は高温で、去年は極端な干ばつもあったので、どう克服していくか。何とかカバーできる場所はカバーして、今年も豊作でいきたい。

大野氏 天候で飼料作物の収量や品質が変わることもあるが、決まった量を決まった期間に出荷する。計画している生産ができないと迷惑をかけるので、きっちりと計画通りに生産したい。

また、ふん尿をいかに有効活用するかも大事。牛を増やすことについて二酸化炭素排出のことも言われ、生産を上げていく中では環境問題も考えていかなないと消費者に説明ができない。環境も考えながら生産することで、消費者に理解をしてもらえるようにする。

—今年の農政で重点的に取り組むことは。

遠藤氏 政策面では、まずは食料安全保障の強化だ。また(30年に農林水産物・食品の)輸出5兆円という目標がある中で、農水省も「輸出・国際局」ができ、態勢を整えていく。1月の輸出は40%増で好調な滑り出しだった。

国内向けも重要だが、中長期的にみると、日本の食料の需要は縮小傾向にあるのは間違いない。農家の生産基盤を守るには、外に出て輸出にも取り組まなければならない。

先日「輸出産地リスト」が公開されて、十勝はチーズやタマネギ、ナガイモ、ニンジン、ニンニクの産地がリストアップされた。一定の優遇措置もあるので広めていきたい。新たなメニューもあり、輸出

に取り組みやすい環境にある。ぜひ輸出促進セミナー開くなど十勝でも進めていきたい。

—ホクレンとして今年力を入れることは。

宗像氏 小麦がそれなりの作柄の中で、消費が若干落ちている。今年7月からの新麦を、早急に入れられる倉庫の態勢にしなくてはならない。小豆も販売強化をしていくことが必須。小豆は小学生に水ようかんを提供したり、消費の応援をしている。

消費拡大として、今まで小豆を使っていないところと連携をして新商品を開発していく。たとえばカルビーとは黒豆と小豆をフリーズドライにしたような塩味のおつまみを作っている。試験的に一部販売もしていてなかなか好評で、新しいニーズを捕まえていきたい。輸入に切り替えたお客さんにもう一度、道産に切り替えてもらうための地道なユーザー運動をしていく。

—バターの在庫も多いと聞く。

千葉氏 生産が順調に伸びていて、消費が減退しているので在庫が積み増しになっている。業務用中心に、脱脂粉乳・バターがはけていかない。まず飲用で飲んでもらうことが第一。メーカーとも協力して対策を打っていく。消費拡大運動で、牛乳乳製品を使ったレシピなどの紹介をしていくなど、消費拡大の活動を継続していく。

また特許庁主催「ブランド総選挙」では帯広畜産大の学生が(十勝和牛を)PRして特別賞を受賞した。そういった活動も生かしていきたい。

—最後に何か伝えたいことは。

村田氏 コロナの影響を受けて、行政やメディアでも消費拡大の運動やってもらい、非常に支えになった。感謝の気持ちを、安定生産で返したいという気持ちで営農に当たりたい。

遠藤氏 われわれ出先機関は、施策を現場に伝え、また現場の意見を聞くことが大事。いろいろな課題も現場と一緒に解決していきたい。要望や要請活動が行われれば、記録として残して全職員が見られるようになる。ぜひいろいろな意見や要望を挙げただけ、施策や予算に何らかの反映をしていければと思う。